

「英語イマージョン・ルーム」の活動

—自律的な異文化交流の推進—

愛知教育大学日本語教育講座教授 稲葉 みどり

Midori Inaba

1. 「英語イマージョン・ルーム」とは*

愛知教育大学では、学生や教職員等が「英語イマージョン・ルーム」に集まり気軽に英語を使ってコミュニケーションすることを楽しんでいる。「英語イマージョン・ルーム」とは、そこに来た人たち同志が「英語を使って交流する部屋」のことで、キャンパス内で英語に親しむ機会を増やすための場として2009年度に開設された。英語イマージョン・ルームでは「ピア・サポーター」として、英語を話すことのできる留学生、帰国子女、留学経験者などに来てもらい、英語を使ってコミュニケーションしながら相互交流を深める活動をしている。この部屋には英語教材や海外情報などの資料、パソコンやインターネットも設備され、学生たちが自律的に学習できるような配慮もしている。小学校で英語教育が導入され、特に教員を志望する学生には国際感覚や英会話のスキルが求められる。授業以外にも英語を使う機会を設け、国際感覚を磨き、英語コミュニケーション力を養成する機会を設けようというのが、開設の背景である。また、学内の留学生、帰国子女、留学経験者等を大切な人的資源として活用し、ピア・サポーターとして積極的に貢献してもらおうというねらいもある。現在、英語イマージョン・ルームは学生や教職員等が海外の知識や異文化体験を共有できる大切な機会となっている。

2. 英語イマージョン・ルームの活動紹介

英語イマージョン・ルームは毎週水曜日の13時30分～15時30分、金曜日16時30分～18時30分に設定している。水曜日の午後は授業がなく、金曜日は教職員が授業後に参加しやすい時間帯である。2009年度は中国（香港）、アメリカ、インドネシア、ドイツ等の留学生が中心になり、代わる代わるにピア・サポーターを務めた。2010年度はアメリカ、ドイツ、インドネシア、メキシコ、スペイン、エジプト等の留学生が協力してくれた。2011年度は、アメリカ、ドイツ、ミャンマー、タイ、スーダン、エジプト等、英語が堪能な留学生を中心に活動している。

活動の内容は基本的にピア・サポーターとその日に集まった人に任せて進められる。一般的には最初にピア・サポーターから自分の国・地域について英語で紹介してもらい、その後、自由に話す形式をとっている。お菓子とお茶も用意され、和やかな雰囲気である。図—1は、香港からの2人の留学生（ピア・サポーター）と日本人学生の交流風景である。地図を見ながら香港の地形、社会、教育制度などについて紹介している様子である。

図—1：香港の学生との交流風景



イマージョン・ルームの定期的な活動に加え、留学生が自分の国・地域の文化、伝統、大学等を紹介するプレゼンテーションの機会を年に数回設けている。図—2は香港の食文化の紹介、図—3はスペインの自治州の説明、図—4はアメリカのテレビ番組の紹介、図—5はドイツの伝統的なクリスマスの祝い方について紹介している様子である。どのプレゼンテーションも写真や映像を用いてわかりやすく構成されている。また、伝統的な服装の披露や食べ物の試食などが行われることもある。留学経験者による英語のプレゼンテーションも実施している。質疑応答も活発で、参加者、プレゼンターともに英語を使ったコミュニケーション活動を楽しんでいる。

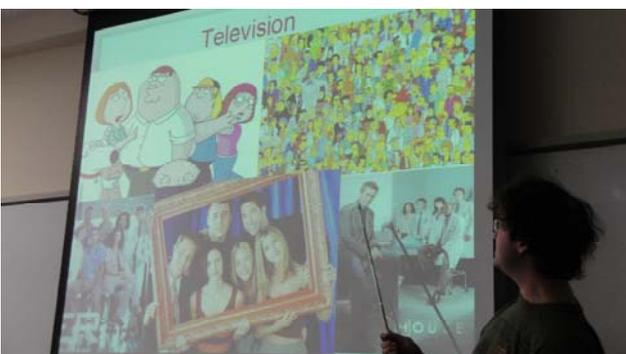
図—2：香港の食文化の紹介



図—3：スペインの自治州の説明



図—4：アメリカのテレビ番組の紹介



図—5：ドイツの伝統的なクリスマスの紹介



図一六：お菓子と葡萄の試食



3. 参加者の感想から見た活動の意義と役割

英語イマージョン・ルームの活動に関する参加者へのアンケート調査の一部を紹介しながら、活動の意義や役割を考察する。まず、英語イマージョン・ルーム開設に関しては、「手軽に英会話ができる」「自分で英会話学校に入らない限りこのように英語を話す機会はなかなかない」「学内にいる留学生と話すきっかけができた」等、英語を話すよい機会であるという旨の肯定的なコメントが多く見られた。参加者が身近なところで英語を話す機会を求めていることがわかる。

一方、参加することに関しては、「はじめは部屋に入るのに勇気がいる」「1回来たら慣れた」「遅れてくると先に来た人たちがすでに話していて部屋に入りづらかった」等、多少のためらいがあったことがうかがわれる。参加者は新しい人との関わりや面識のない留学生と話すことに多少抵抗をもっていたようだ。

参加人数に関する意見も出た。参加者数は3～10名程度で毎回異なるが、「人数が少ない方が話しやすくよい」と思う人と反対に多い方がよいと考える人が見られた。多い方がよい理由として、「人数が多い方が他の人の話も聞ける」「英語でどう言うかわからないとき他の人が助けてくれる」「知恵を出し合うことができる」こと等が挙げられ、外国語による異文化交流で重要なことに気づいたことが示唆される。

「しゃべる人とそうでない人がはっきり分かれていた」という報告もあった。実際のコミュニケーションでは、人数の多いときもあれば、少ないときもある。一対一のコミュニケーションとともに、グループでのコミュニケーションにも慣れる場として活用されればよいと思う。

異文化交流については、「留学生が日本の意外な面に興味をもつことが分かった」「日本に対するいろいろな見方を知った」「異文化について学ぶ良い機会である」等の感想が見られた。全体としては、「知らない友達と知り合えるのは楽しい」「プチ留学したみたいだ」「異文化をお互いに話し合えて面白い」等の様々な発見があり、異文化理解が進んだことを示している。

英語学習については、「英語でコミュニケーションをとるという貴重な機会」「もっと積極的に話せたらいい」「スピーキングに対するモチベーションが上がる」「それ以外の時間でもお互いに示し合わせて話す場を作れたらよい」等の感想が見られた。

ピア・サポーターからは、「最初はとまどったが日本人と話してみたら楽しかった」

「準備をしっかりしていきたい」「日本人学生が自分の国（アメリカ）のことを知らないことに驚いた」「やりとりを通じてアメリカと日本の大学の相違に気づいた」「学ぶところが多かった」等の感想が寄せられた。また、「英語を使うことでこれまで日本語ではできなかった深いコミュニケーションがとれた」と喜びを表した人もいた。「知らない人同志の集まりでは日本人は何も言わずに黙っているので、アイス・ブレイカーが必要だ」というコメントも出された。ピア・サポーターを務めることは、一方的に情報を提供するだけでなく、その人自身にとっても日本を知る機会を増やしたといえよう。留学生の中には周りに日本人はいるが友達になる機会がないという話を時々耳にする。この活動は双方にとって面識をつくる良い機会にもなっていると思われる。

4. 異文化コミュニケーション力の養成に向けて

参加した学生の感想から、英語を使ってコミュニケーションする際に学生が身につけるべきことの一端が見えてきた。学生はこの活動に初めて参加する際ためらいや不安を感じたと述べている。これから英語で挨拶や自己紹介をしながら会話の中に上手に入っていくことに慣れていないことがうかがえる。欧米の社会では、社交上手であることが求められる。パーティーなどでは先にいる人は後から来た人を閉め出さないように上手に仲間に入れる。後から来た人も自己紹介しながら自然に話の輪の中に入っていく。いつも仲間同志だけで話す傾向にある日本人とは大きく異なる。このような英語を話す社会のコミュニケーション・スタイルを知り、慣れることが海外経験の少ない学生や英会話に不慣れな日本人学生が先ず身につけるべきことであろう。

海外に行ったときすぐに必要なことは、知らない人々の中に飛び込んで行って上手にコミュニケーションすることである。英会話のクラスでは、英語を話すスキルは養成できても、ほとんどの場合毎回メンバーが決まっているので、初めての会った人たちと上手に話して社交をする力を身につけるには十分でない。

しかし、英語イマージョン・ルームの活動では、毎回どのような人が何人来るかわからない。日本人同志でも初対面の人と話したり、交流したりする機会が多い。さらに英語イマージョン・ルームの活動は、一定の形があるのではなく、毎回ピア・サポーターと参加者によって作りあげられていくものである。よって、多様なコミュニケーション・スタイルを経験できる良い機会となり、様々な場面に対応できる異文化コミュニケーション能力を高められるのが長所と考えられる。

5. 英語イマージョン・ルームの今後の展開

現在、英語イマージョン・ルームの活動はさらなる展開をむかえている。本学に在籍する様々な国・地域の留学生や研究者の協力を得て、「英語以外の言語」によるコミュニケーション活動が始まった。今後は中国語、モンゴル語、ドイツ語、タイ語、韓国語、ポルトガル語、インドネシア語等の言語や文化に触れる機会を増やしていく予定である。また、留学生が日本人学生と日本語で話す場を提供し、日本紹介のプレゼンテーションもする計画である。

本学ではキャンパスの国際化とグローバル・リテラシーの向上、学生の英語運用力の養成をめざして、日本人学生をアメリカの国際交流協定校に派遣し日本語や日本文化を英語で紹介するプログラム（稲葉 2005）や留学生を招聘して日本語・日本文化の短期研修を行うプログラム等を実施してきた。これらは幾分ではあるが学生のグローバル・リテラシーの向上に役割を果たした（稲葉 2008）。英語イマージョン・ルームの活動も今後さらに充実させていきたい。

注

* 本稿は稲葉（2010）をもとに英語イマージョン・ルームの活動を紹介する。

参考文献

- 稲葉みどり(2005).「米国における教育実習プログラムの成果と充実の方策」 『教育実践総合センター紀要』 8号. pp. 145-156.
- 稲葉みどり(2008).「国際交流と学生のグローバル・リテラシーの向上—アンケート調査による効果の分析」『教育実践総合センター紀要』 11号. pp. 33-40.
- 稲葉みどり(2010).「英語イマージョン・ルームの開設—プロジェクトの役割と今後の可能性」 『教育実践総合センター紀要』 13号. pp. 37-44.